「この御子こそ」　　２０２２年4月3日

テサロニケの信徒への手紙一１：２～１０

佐々木　佐余子

今教会ではレント（受難節）という時期ですが、それは主イエス・キリストが十字架にかけられて苦難を負われたことをキリスト者たちが覚えて悲しみ、己を見つめて悔い改め懺悔する時として大変大事な時となっています。今回はパウロの最初の書簡「テサロニケの信徒への手紙（一)」から学びを共にします。この手紙は紀元後５０年ごろ、すなわち主イエスが十字架で亡くなられ、復活されて１５年たったころ執筆された一番古いパウロの手紙です。パウロは皆さん良くご存じのように元の名はサウロと言って反クリスチャンの律法学者でした。主イエスを信じている者を目の敵にして捕らえ引っ張って行く人たちに賛同し獄に入れることを黙認していました。そのサウロが天の啓示によって１８０度向きを変えられ、今までの自分を悔い改め懺悔し主の伝道者に変えられたのでした。これは実に驚きの軌跡と言えます。神さまは歴史の要所、要所に人物を配置されるのです。そして救いのみ業を導かれます。まさに聖霊が先だって歩いてくださっているのですね。

パウロは３回の宣教旅行をしました。１回目はパウロがおよそ４０歳の頃でした。けれどいきなり宣教をした訳ではなく、数年準備期間があったのでした。主の弟子にアナニヤという人がおり、パウロに手を置いて癒しました。パウロは目から鱗のようなものが落ち見えるようになったのです。そして信仰が深まっていき生涯主イエスを宣べ伝えていきます。その間、迫害の手が伸びますがヘロデ王が急死すると、神の言葉はますます栄え広がりました。そして、主の弟子バルナバとパウロが宣教旅行に出発するのでした。そこから第１回目の宣教旅行が始まりました。

そして第２回目の旅行が紀元後４９年から５２年の３年間です。パウロがおよそ４１歳から４４歳までのことです。テサロニケはローマの支配下にありました。政治や商業、軍事の中心地であり繁栄していました。パウロはシルワノと共にアンティオキアを出発し、途中ルステラでテモテと一緒になりトロアスに到着したのです。テサロニケの信徒への手紙（一）１章をごらん下さい。１節「パウロ、シルワノ、テモテから父である神と主イエス・キリストとに結ばれているテサロニケの教会へ。恵みと平和があなたがたにあるように」とあります。このシルワノはエルサレム出身で預言の能力を持つ新しい伝道者でした。テモテはガラテヤ州出身の評判の良い忠実な弟子で、パウロをとてもよく助けました。パウロは自分だけの名を記すのではなく、２人の協力者の名を連名しています。ここにパウロの気持ちが表れています。伝道はただ１人でするのではなく、というか１人では出来ないので協力者が大事だと考えているのです。教会もそうです。牧師だけで伝道できるわけではなく、多くの協力者が支えて伝道できるのです。そのことをパウロは最初に書いた手紙で教えています。

さて、どうしてパウロはテサロニケの信徒たちに手紙を書いたのでしょうか。その理由の一つ目は主の来臨の教えが正しく伝えられていないことと、二つ目は倫理・道徳面で清い生活をするよう導くためです。信徒の中には主の来臨が直ちに来ると思い込み、けじめのないルーズな生活を送っている人たちもいて、来臨がまだ来ないからと必要のない心配をしたりむやみに悲しんだりする人がいたのでした。そういう人々を正しく指導しなければならないと考えたのです。教会はギリシャ語でエクレシアというのですが、もともとは市民の集会を指している言葉です。ですから１章の１節にテサロニケの教会へとありますが、それはテサロニケの集会へ置き換えてもわかりやすいですね。教会というと建造物を想像しますので。２節からは「主に倣う者」になりなさいとお勧めをしています。使徒言行録にありますが、パウロがテサロニケに赴いた時の事件が書かれています。使徒言行録の１７章１節を読むとこうあります。「パウロとシラスはアンフィポリスとアポロニアを経てテサロニケに着いた。ここにはユダヤ人の会堂があった。パウロはいつものようにユダヤ人の集まっているところに入っていき三回の安息日にわたって聖書を引用して論じ合い、メシアは必ず苦しみを受け、死者の中から復活することになっていたと、またこのメシアはわたしが伝えているイエスであると説明し論証をした」のです。伝道は良い結果をもたらしたけれど、ユダヤ人たちが妬み暴動を起こしました。しかし、その迫害の中で蒔かれた福音の種はテサロニケ教会の誕生と成長という形で実っていくのです。普通蒔かれた種は水をかけ日光を受けて発芽するでしょうに、迫害の中で逆境にあっても芽が伸び成長したのです。以前信州に行った時の話ですが面白い不思議な種ではないのですが球根がありました。名前は憶えていないのですが、机に置くと、時が来ると水もかけないのに芽が出て伸び大きくなって花が咲いたのです。薄ピンクの一重の花でした。植物の中にもこういうのがあるのですね。それでいつも思い出すのです。福音の種も迫害の中にあっても芽が出て成長するのだっていうことを。２節を読むとパウロはいつも感謝していました。テサロニケで騒動が起こっても、神を崇める多数のギリシャ人や主だった婦人たちが従いました。またヤソンという人が守りました。ヤソンはユダヤ人ですが改宗してクリスチャンになった人です。彼は自分の家で人を集めて礼拝しその後、その家は教会になりました。パウロは回想しながら人々に感謝したのです。テサロニケの手紙の中で一番知られているみ言葉は５章１６節にある「いつも喜んでいなさい、絶えず祈りなさい、どんなことにも感謝しなさい」です。正直、このみ言葉は違和感があるのです。悲しいことがあっても苦しい時でも感謝できるかしら、と思ってしまいます。けれど、パウロが言っていることはこうなのです。テサロニケのクリスチャンは教会に行く前は、ただ虚しく偶像を信じ拝んでいたのでした。テサロニケには多くの神々が立てられていました。ギリシャの神ディオニソスやエジプトの神々イシス、オシリス、セラピスそしてフリギアの神カビルスが信心を集めていました。そしてローマの皇帝も神だったのです。けれどそういう中にあっても、神はあなた方を選び多くの滅びゆく偶像の中から天の神、主イエス・キリストを信じるように導かれ救い出してくださったから感謝しなさいと教えました。

私の子供の頃の話をさせていただきたいと思います。近くに神社があり不動尊が祭られていました。毎月２８日が縁日なのです。その日には大勢の人が集まりました。私も父と行ったことがあるのですが、道路のわきには屋台がずらっと並び金魚すくいやわた菓子、風船、焼きトウモロコシが並んでいました。ただ見るだけで楽しかったです。「飴でも買ってくれないかな」と思いつつ、でも金魚すくいはさせてくれました。縁日が来るたびにそわそわしたものです。と言うのも他に娯楽はあまりなかったのでした。けれど今では何がいいのかさっぱりわからない。年を取ったせいもあるけれど大人だって来ているのです。今住んでいる家の近くにお寺があるけれど、少しも寄りたいとは思わないのです。パウロが語るには４節「神に愛されている兄弟たち、あなたがたが神から選ばれたことをわたしたちは知っています」とあるように、そういう環境の中から神は、私たち一人ひとり選んで救ってくださったのでした。そして６節にあるように「あなたがたはひどい苦しみの中で聖霊による喜びをもって御言葉を受け入れ」とありますが、テサロニケの人々はクリスチャンになるためにひどい苦しみを通リ抜けなければなりませんでした。テサロニケに住んでいるユダヤ人やギリシャ人たちが教会に行き、信仰を告白することは当然周囲から圧力を受けます。「行かない方がいいよ」とか嫌がらせを受けたりするのです。反対する人たちは町のならず者を集めて暴動を起こし市の役人たちに訴えたとも伝えられています。そのような目に合っても教会に入ったのでした。７節にあるように「マケドニア州とアカイア州にいるすべての信者の模範になるに至った」とあります。すべての信者の模範になったってすごいですね。マケドニアはギリシャの北部の州であり、アカイアはギリシャの南部の州ですけれども、彼らは２つの点で模範になったのでした。１つは偶像礼拝を乗り越えたこと、２つ目は正しく主の来臨を信じたことです。この来臨のことですが現代人には少々わかりにくいので少し説明をしておきます。天に帰られた主イエス・キリストがこの世の終わり・終末の時、この世に来臨され人々を審判される、という信仰です。クリスチャンたちはいつも待ち望んでいました。「主よ、来たりませ」と。この背景には少しずつ強くなるローマ皇帝の迫害がありました。この世の終末には人間に審問（裁き）が行われ天国への道か、あるいは地獄への道かに別れるとされています。しかし、主イエスを信じる者は天国の門が開かれるという信仰です。現代も世評を考えるに、非常に危機的状況にあるのではないでしょうか。ですからキリスト者にとってもテサロニケのクリスチャンたちと通じるところがありますね。

来週は受難週に入ります。主イエス・キリストが人間のため身代わりになって十字架に掛けられたことを身に染みて覚える週です。１０節「この御子こそ、神が死者の中から復活させた方で、来るべき怒りから、私たちを救ってくださるイエスです」。あれから２０００年も経過したけれど初代教会のクリスチャンたちの信仰が生々しく迫ります。